

甲子プロジェクト研究会の報告

武庫川女子大学生活環境学部教授 生活美学研究所研究員 黒田智子

1. 研究会の背景と目的

本研究会の切掛けは、2015（平成27）年、武庫川女子大学で開催された意匠学会大会に遡る。大会シンポジウムのパネリストの一人として、あまり語られてこなかった甲子園ホテルの設計意図について試みてきたこれまでの考察を要約し、「打出の小槌と共に一光と水の建築」と題して発表した。聴講された学会員の方々から思いがけず興味の声が上がったのは、大会の会場がまさにかつての甲子園ホテル（現・甲子園会館）だったことが大きいと思う。意匠学会の会員であれば、その装飾性豊かな格調の高さが、近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトの作風を良く受け継ぐライト式である、という説明だけでは物足りなくても不思議はない。また、意匠やデザインを論じる際、グラフィック、建築装飾、景観などは、通常、それぞれ別分野で論じられるのが通常である。

一方、筆者は、遠藤独自の設計意図を求めて、開業時のリーフレットから建築装飾の形状と配置、建築の景観、敷地周辺の水の流れまで横断的に分析対象としてきた。遠藤が遺した記述が少ないことが直接の理由ではあるが、ライトが帝国ホテルにおいて心に描きながら果たせなかったトータルな空間デザインを、遠藤もまた理想としたと考えるのが自然だと思うからである。

その年の大会委員長であった生活美学研究所・森田雅子所長からの要請で、筆者は、翌2016年から新たな研究会を主宰することになった。それが、甲子プロジェクト研究会である。5年計画で開始したが、昨年度で丁度5年が経過し、研究会は新たな局面を迎えている。これを期に、これまでを振り返り、初期の目的に対する成果と課題をまとめておきたい。

1930（昭和5）年に開業した甲子園ホテルは、1965（昭和40）年以来、武庫川女子大学の校舎として修復・活用され、現在、上甲子園キャンパスの核をなしている。ライト式建築の中でも規模が大きく当時の姿を良くとどめた名建築として知られ、国内外から見学者が訪れる。近年は、映画・ドラマ等の撮影にも使われ、幅広い層が画面で目にする機会も増えた。

設計したのは、近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトの愛弟子として知られる建築家・遠藤新である。不思議なことに遠藤は、甲子園ホテルの建築表現の意図についてあまり記述を残していない。中には自作の表現意図を語らない主義の建築家もあろうが、遠藤はそうではなかった。自らの作品はもちろん、ライトのチーフ・アシスタントとして献身した帝国ホテルをはじめ、当時の話題建築についても積極的に論じる建築家だった。東京帝国大学卒業の翌年、完成したばかりの東京駅についての論評を5日間にわたって読売新聞に連載するほどで、もともと筆が立ったことが分かる。また、甲子園ホテル完成時には、家族・親類知人と記念写真を撮り、尊敬する師・ライトへ手紙に添えて多くの建築写真を送っていることから、まぎれもない自信作だったと思われる。したがって、筆者は、甲子園ホテルの建築表現については、「語られたこと」を起点に考えるのは言うまでもないが、「語られなかったこと」の中にこそ、遠藤の真意を見るべきだと考えたのである。

そこで、筆者は、甲子園ホテルの設計意図を知るために、遠藤が遺した数少ない記述を語れるところまで語った証として尊重し、そこに立脚してグラフィックから景観までを対象に分析・考察を進めてきた。建築論・意匠論における考察としては、筆者が所属する生活環境学科の教育・研究誌『生活環境学研究』をはじめ日本建築学会・日本インテリア学会等に僅かずつながら報告を続けてきた。同時に、建築自体を「良く見る」ことから始めた。それは、歴代の学院長のもと、関係各部署が一体となって取り組んでこられた保存と修復を踏まえた活用によってこそ可能であった。それゆえ、自分だけでなく、学生たちと共に授業やゼミで空間体験をし、思うこと、感じることを発展させ、論文や作品にしていく過程を大切にしてきた。そのような中で、卒業論文としてまとめる学生が現れたのは2004年であった。基礎造形実習および建築・インテリア設計などの実習の授業については、その近傍で準備を始めたと記憶する。

ところで、筆者の専門分野は、建築論である。文献資料を翻訳、調査、解釈するのが主たる研究方法である。質の高い建築が本学の校舎であることは、まぎれもない幸運であるが、建築論から入ると主観と客観の間で不可避免的に逡巡する厳しさを避けられない。学生たちの中に芽生えた新鮮な興味が育たずに消えてしまうことは避けたい。そこで、甲子プロジェクトでは、様々な分野の第一線の方々にご講演をしていただき、生活美学研究所関係者や周辺地域に居住される生活美学研究所の会員と共に、学生たちにも聴講してもらい、その興味の発展・成長に期待をかけた。設計やデザインに興味がある学生たちに、遠藤新の会心の作・甲子園ホテルの建築表現の深さや大きさに触れてもらう貴重な機会となるのではないかと考えたのである。

2. 研究会の視点と方法

各分野からご講演頂く場合、内容が聴講者の知的興味や関心を刺激し、これまでにないものの見方や考え方を提示するものであれば、それは情報発信をする側・される側双方にとって心躍る喜びにつながる。同時に、主宰者である筆者にとっては、遠藤の設計意図のぼんやりした輪郭を明確にするのが甲子プロジェクト研究会の目的であり、そのことにも興味をもってもらいたい。研究会の方針がしっかりとした骨組みをもつだけでなく、同時に包括的な枠組みでもあるようにしておくことが必要だと考えた。

そこで、まず、遠藤が尊敬してやまない師・ライトが提唱したことで知られる「有機的建築」に注目した。そして、有機的建築の理念・方法から2つを選択し、それに照らして講演のテーマを設定することにした。もしそこで遠藤にしか見られない建築理念や表現が明らかになれば、それこそが遠藤の独創性だと考えたのである。遠藤は、師・ライトについて「彼の偉大な過去の数世紀を空しうする、そしてさらに来るべき数世紀をも空しうするだろう」（「ライト氏に就いて」、科学知識、1924.4）とのべている。それほどの大天才であるというのである。背景や文脈が分らないと、単に大げさと感じてしまうようなまさに手放しの称賛ではないかと思う。同時に遠藤は、そんな天才がするように設計するにはどうしたらよいかを自ら模索し続けたことが、遠藤自身の建築論から伺える。その努力は誰にでも真似することは難しいと思う。同時に、そんな努力の中に、仮にほとんどライトと同じだとしても、ライトの理念と方法には包含されない遠藤独自の建築の捉え方があるのではないかと思うのである。

選択した有機的建築の二つの理念のうちの一つは、建築と周辺環境、特に自然との調和、もう一つは、内側から外側に向かう (from within outward) 建築表現である。遠藤は、独立間もないころ、

建築と周辺環境の調和について、「まづ地所を見る 地所が建築を教えて呉れる」（住宅小品 15 種、婦人之友、1924.5）と述べている。その後も、「建築を敷地における「たたずまい」として考える立場」（新春建築雑感、婦人之友、1939.2）を大切にしている。その間に発表された、甲子園ホテルの建築表現について述べた数少ない記述「甲子園ホテルの場合」（婦人之友、1936.9）においても、「先ず初めに、建築のたたずまいを考える」という書き出しで始めている。したがって、甲子園ホテルの敷地条件や周辺環境の考察は、甲子園ホテルの設計意図や建築表現を知るうえで不可欠と考えてよいと思う。

一方、内側から外側に向かう (from within outward) のような建築表現については、それほど単純ではないだろう。そこには、さらに二通りの意味があると解釈される。一つは、文字通り建築の内部空間から外部空間へ向かうという意味である。ライトは、建築の価値は、屋根や壁の形ではなく、内部空間にあるとした。遠藤も、「地所が教えて呉れる」のは、「いかに生活が許されるか いかに生活が伸びられるか」（住宅小品種、婦人之友、1924.）であると述べている。つまり、建築という枠で生活を規定するのではなく、建築が包含する生活を建築の形に先立って重視する立場である。

もう一つは、建築表現という目に見える存在の内側にあつて建築を形づくる目に見えない存在である。それこそが、通常の建物を芸術に高めていく建築表現の意図であろう。甲子園ホテルは、豊かな装飾性が特徴であるが、それがどのような意図に依るのかは語られていない。例えば、ホテルのシンボルマークである打出の小槌をモチーフに、抽象・具象の建築装飾を内部・外部に配置して空間を演出している。そのような手法による建築は、古今に見られない、というのが、日本建築史、西洋建築史両方の専門家からのコメントである。その中のいくつかがどのような意図で造形され配置されたのか、各室や他の装飾とどう関係づけられているのかを想像するのは楽しいことだが、そのままでは主観的想像の域を出ない。また、抽象的な表現の場合、それを打出の小槌とは捉えられないという見方もあるだろう。

明確なのは、それが、遠藤の設計姿勢とは違うということである。遠藤は、建築を享受する側に楽しい想像を喚起しつつも、建築家としては「建物を考えるなら動かぬところまで考えなければ嘘だ」（新春建築雑感、婦人之友、1939.2）と自身を戒めている。設計という行為には、あれでも良いしこれでも良い、というような余剰は存在しないのだ。

そこで、筆者は、建築表現は誰のためにあるのか、という基本に立ち戻ることにした。ライトは帝国ホテルの設計時に、度重なる設計変更をして膨大な予算超過を招いたとされる。そこから完全主義者としてのライト像が生まれたのであろうが、このことは、人を寄せ付けないまでの表現者としてのエゴつまり「利己」を想起させる。しかしながら、ライトの建築家としての真意は、それだけで説明できるものだろうか。特に愛弟子とされる遠藤には、チーフ・アシスタントとしてライトのもとで働いた時代から、「人と対話する建築」、「優しく包み込む建築」という言説が見られる。それは、後に、建築を「動かないところまで考える」ための根拠になっていると思う。それが、甲子園ホテルの設計にまで貫かれているのなら、表現において「利己」ではなく「利他」を視点とするのは有効ではないかと考えるのである。

甲子園ホテルの場合、「利他」の対象は、施主であり、宿泊客を含む来訪者であるだけでなく、立地する周辺地域に住む人々が想定される。そこで前述のように、①遠藤が遺した記述と、②開業当時のホテルのリーフレットと、③当時の姿を8割方留める建築と、④敷地条件・周辺環境の特徴をもとに、筆者自身が、動かないと思うところまでは迫ってみることにした。それが、研究

会発足前に準備としてまとめた「甲子園ホテルのシンボルマーク・打出の小槌の意図と背景」(生活美学研究所紀要第26号、2016)である。研究会1年目には「利他」を視点に建築装飾と大黒天信仰およびホテルが建つ土地の水害・早魃の歴史との関係を考察した「甲子園ホテルの企画・設計理念と背景—「利他」と「利己」をめぐる試論」(甲子プロジェクト報告集第1号、2017)を発表した。さらに2年目には、同じく「利他」を視点に、遠藤新によって完成した甲子園ホテルと、大屋霊城によって別の敷地に以前に提案されていたホテル(海浜のホテル、1926)を比較した「甲子園ホテルの企画・設計理念と背景その2—「利他」を視点とした同時代の計画案との比較から」(甲子プロジェクト報告集第2号、2018)を発表した。拙い思考の成果であるが、研究会での成果との関係を次にまとめておく。

3. 研究会の成果

甲子プロジェクトでの5年間の研究会のテーマは、前述の「利他」を視点として4つに分類ができる。①敷地と建築の関係を明らかにすることを目標にした「甲子園ホテルの敷地条件」、②象徴的表現の意味を考察することを目標とした「打出の小槌が担う信仰と表現」(ここに、宗教・信仰と建築表現の関係の考察を含む)③遠藤と学生時代から交流があった甲子園ホテル支配人・林愛作と日本の伝統美術、そして、近年の④トマス・トマスカーライルの『衣裳哲学』をめぐる遠藤とライトの建築論についての考察である。すべて各分野における専門家によって貴重な内容をご講演頂き、最初の2年は、『甲子プロジェクト報告集第1・2号』に、3年目からは、『生活美学研究所紀要第29-31号』にご寄稿いただいている。どれも、幅広い層の読者を念頭に、読みやすく興味が喚起される内容であり、ご専門の立場から事実関係を精査されている。さらに、原稿として活字化する段階でリライトされ一層の充実があり、一人でも多くの方に読んでいただきたいと願っている。これまでに、学内では生活環境学科・生活造形学科の学生が数多く聴講させていただいた。そのこと自体が大きな成果であり、深く感謝するものである。

以下、「利他」を視点に、研究会の成果を要約する。

3-1 甲子園ホテルの敷地条件

西尾嘉美先生(西宮市郷土資料館)には、「川から街へ—「甲子園」をめぐる治水と開発」(2017.6.17)と題して、武庫川について広域的・歴史的に総括していただいた。筆者は、立地条件として周辺環境の特徴を知るために甲子園ホテルが建つ旧鳴尾村の治水や水害の歴史を調べたが、西尾先生はそれらを、より大きなスケールで時空に位置づけられた。福島県相馬町の農家に生まれた遠藤は、農村の暮らしの苦楽を経験的に知っており、治水や灌漑用水への想いは、出身地を越え日本人としての共感をもっていと改めて思う。

ところで、甲子園ホテルの設計は、仮設計から完成まででさえ1年6ヶ月に満たない。建築の完成度が設計スピードを伴っていることに驚かされる。敷地調査には時間をかけられなかったと思う。ただし、仮設計から遡る4年ほど前、遠藤は近隣にライトのスケッチをもとにスタッフの南信(まこと)とともに山邑邸(1924)を完成させており、相応の土地勘を持ったと考えられる。一方、西尾先生は、甲子園ホテルの畔を流れる武庫川の長さ水系、水害の歴史を示された。それにより、武庫川は、山邑邸の敷地条件を特徴づける芦屋川とは全く異なる規模・特性を持つことについての認識を促していただいた。甲子園ホテルは、武庫川の支流である枝川の上に建っている。このことは枝川とさらに支流申川の廃川が前提である。それによって新たに739200㎡の巨

大線型開発地の出現が、ホテルの建築表現に与える影響は極めて重大とって良いと思う。この線型の土地は、阪神電鉄によって開発され、先の大屋霊城の海浜ホテルと甲子園ホテルは電鉄の開発の一環であった。枝川廃川を「利他」からみると、周辺地域の農家にとっての甲子園ホテルは、廃川が与えた「水」への影響抜きには語れない。灌漑用水をめぐる遠藤の敷地条件についての認識を明らかにすることの重要性が改めて示唆される。

さらに西尾先生は、枝川とさらにその分流の申川の廃川によって生まれた新たな土地に阪神電鉄が行った開発についても概観された。甲子園ホテルが、その広大な土地開発に担った役割とは、当初は、阪神甲子園駅以南に次々に開設されたスポーツ・レクリエーション施設の一環であった。「利他」から見た場合、集客を目指す電鉄が海辺に計画するホテルと、迎賓館として開業した甲子園ホテルには、そもそも来訪者とそのニーズに違いがあることは明らかであろう。それに対応するかのよう、甲子園ホテルは、枝川が流れ込み海辺ではなく、枝川が武庫川から分岐する起点にある。

そこで、筆者は、「利他」の観点から、先に提案されていた大屋霊城のホテル案と遠藤の甲子園ホテルを比較した。当時、大屋は都市計画家・造園家として著名で甲子園開発地の計画（1926）を提案、その中に海浜のホテルも配置されている。また、甲子園ホテルの南側に位置する大湯池が、大屋案では「水源地」と名づけられていることが注目された。甲子園ホテルの現場が進行する頃、大湯池の水量が足りなくなったことを受けて、電動ポンプで水を汲み上げたことが新聞記事になっている。大屋の計画案は、「水源地」の場所の設定が少なくとも1926年つまり甲子園ホテルの敷地選定（1927）以前にはあったことを示唆するものである。さらにこのことが切掛けで、甲子園ホテルの東側には新開発地のための上水道の水源地が準備され、やはり、近代化を告げる電動ポンプによって豊富な地下水を汲み上げることで実現していたことを確認した。甲子園ホテルの南側と東側に、農村と新開発地の人々の暮らしのための「利他」の地下水があったのだ。しかも、上水道が完成する前の開発地の宅地分譲パンフレットには、宅地のどこを掘っても豊富な井戸水が得られることを謳っている。このことは、枝川が廃川となってもその下を豊富な地下水が流れていたことを表すものであろう。さらに山邑邸の施主が櫻正宗当主であり、地価の湧水・宮水の発見者でもあることは、遠藤の記憶のイメージに重なるものだったかもしれない。

近代化と地下水の汲み上げが、地域と景観をどう変えていったのか、そこに甲子園ホテルの「利他」を位置づける課題の取り組みは、現在も進行中である。

さらに、西尾先生は「水の流れがもたらすもの—武庫の川と茅渟の海」と題してご講演してくださいました。白砂青松の鳴尾の地において、海は眼前に広がる水の世界である。武庫川はもとより、かつては枝川と申川もそこに注いでいた。水と「利他」を結びつけるなら、海との関係も想定し得る。例えば、甲子園ホテルの二本の塔の付け根にある日華石のパネルのレリーフは、甲子園ホテルにおいて最大の建築装飾である。これまでの考察から、大海原との関係でその意味を読み解けるのではないかと考えている。

3-2 打出の小槌と福の神への信仰

西宮えびす神社宮司吉井良昭先生には、「西宮神社のえびすさまと大黒さま—「甲子に関連して」（2016.11.19）と題してご講演頂いた。甲子プロジェクト最初の研究会である。福の神ということになると、西宮市内にはなんといっても西宮神社が鎮座、全国から参拝者を集めるえびす宮総本社である。一方、全国の高校球児が集う甲子園球場に「甲子園」と名づけたのは阪神電鉄専務であり、甲子園球場建設を推進した三崎省三である。三崎が西宮神社に参拝した際、本殿に大きく

墨書きされたその年の干支「甲子」を目にして、日本一の規模を誇る球場の名前にしようと決意したと神社に伝わるといふ。三崎に降りた神託として受け取れる縁起の良いエピソードだと思う。

西宮神社には、本殿と境内の二か所に「大国様」が祀られている。「大国様」と大黒天との習合についてもご講演頂いた。甲子園ホテルのシンボルマークは打出の小槌である。それは大黒天の象徴であり、大黒天は「甲子」を縁とする。そして、「甲子」の年に完成した甲子園球場が、開発地において「甲子」を用いた最初である。その「甲子」を含む「甲子園」が、ホテルにも、枝川廃川による開発地にも名称として用いられるのだが、それは、阪神電鉄専務の西宮神社参拝に由来しているということになる。

また、74haという当時最大の土地開発に乗り出し、まず甲子園球場、その後甲子園ホテルを開業した阪神電鉄にとって、この二つは開発地のシンボルであろう。それぞれかつての川の分岐点に位置していることは、①との関連でも注目される。福の神である西宮神社参拝が命名の由来である「甲子」は、大黒天との縁を持ち、その大黒天を象徴する打出の小槌もまた縁起が良い。「利他」の観点から、シンボルマークとした打出の小槌を建築装飾に用いることが建築家にとっての「他者」としてまず経営者を喜ばせることは疑問の余地がない。

西宮神社には、甲子園ホテル開業の翌年、結婚式のためにホテルを視察し、合計19日ホテルに出向かれたとの記録があるという。地域の信仰と人々の暮らしとの関係の記録としても非常に貴重だと思う。それに加えて、迎賓館としての甲子園ホテルが、このような形で西宮神社と関係したことも興味深い。

西尾先生には、「大黒様」についての信仰の変遷を、主に日本人の生活文化史との関係でご講演頂いた。甲子園ホテルが完成する昭和初期、人々は打出の小槌を「金銀を出し、生活を豊かにしてくれるもの」と認識するに至ったという。それを設計する側の「利他」という観点から言い換えると、打出の小槌をモチーフとする装飾が、来訪者にとって、親しみやすく縁起の良いものとして目と心を楽しませたと捉えられるだろう。同時に、来訪者や施主がこれらの装飾をみて自らの富貴のみを願うなら、彼らにとっては「利他」ではなく、「利己」、「自利」にとどまることになる。

叡山学院教授の武覚超先生には、「比叡山の神と仏—その習合思想と利他の教え」(2019.7.6)と題してご講演頂いた。まさに日本人の「利他」の原点として、神仏一体の考え方に触れることができたと思う。武先生は、難解な密教の教義に即しつつ、日本人が区別なく寺院でも神社でも手を合わせるという誰の目にも明らかな事象から、分かりやすく語り起こされた。比叡山延暦寺における神仏一体の歴史は、最澄による開創以前、奈良時代すでに比叡山に鎮座された地主神に遡る。そこに、最澄、円仁、円珍、良源を中心に時代に応じ天台宗の歴史が刻まれた。それは新たな神々の勧請を伴い、常に神々の加護を祈った歴史でもある。しかも、現在も続く山王21社の祭神はそれぞれ本地仏をもつ。仏が姿を変えて神となる本地垂迹の考え方は、文字通り神仏一体なのである。このような基盤の中で修業した法然、親鸞、日蓮、道元、栄西が、鎌倉時代、それぞれ浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、臨済宗を開いた。それは、現在も神仏に手を合わせる日本人の精神史の基盤を知る上で重要ではないかと思う。

このことを踏まえ、大黒天に着目すると、比叡山の大黒天は、もともと、天台宗開祖伝教大師が比叡山開山において感見の老翁で、比叡山での仏道修行を守る役割がある。本地垂迹説により本地を釈迦如来とし、大比叡山王である三輪明神大己貴神と同体とする。さらに諸仏・諸菩薩・諸明王・諸神と一体と捉えられているが、三面六臂の姿をとることから、毘沙門天・弁才天と一体の三面大黒天が信仰されているという。そこから大黒・毘沙門・弁才の三面一体に至ったという。

そして本地仏は釈迦如来であるという。大黒天は、釈迦如来が、様々な姿となって、人々を利する存在ということになる。

釈迦如来は、いうまでもなく仏教の開祖であるから、そのような神仏一体の心とはまさに「利他」であるという。伝教大師最澄は、それを「道心」とも呼び、それは「慈悲」の心であると説いた。「悲」とは、人々の苦しみ悩みを何とか救おうとするあわれみの心、「慈」とは、自分の得たものをもとに分ち合い、他に与えたいという慈しみの心」である。本地である釈迦如来が始めた仏教の原点と思われ、それが大黒天の様々な姿と働きの元なのだ。

そうであるならば、変幻自在な大黒天は、甲子園ホテルでは打出の小槌をモチーフとする抽象・具象の装飾に、「道心」、「慈悲」の心は、それらの装飾が水の流れに沿って配置されることに対応すると捉えられるのである。ホテルのある地域一帯が、水害と旱魃に悩まされたことは、ちょうどよい分量の豊穡の雨への人々の悲願と呼応する。

さらに、この建築表現は、ホテル来訪者の心に願い働きかける「利他」でもある。それは、自らの豊かさを願う「利己」、「自利」とは方向性が異なる願いであり、甲子園ホテルの設計意図として注目される。矛盾の無い説明を得たと思うが、天台宗は密教（秘密仏教）ゆえに、俗世に生きる建築家遠藤が容易に知り得ない内容ではないかと思われ、結論付けることはためられた。

3-3 林愛作と日本美術

遠藤新は、帝国ホテルでも甲子園ホテルでも常務取締役兼支配人を務めた林愛作と、学生時代から交流があったことが分かっている。東京帝国大学3年生の時に訪れた帝国ホテルで、遠藤は初めて林と出会い、ライトが新帝国ホテルの設計者となるという情報を得る。遠藤の卒業設計は「都市ホテル」(City Hotel, 1914)、卒業論文は、「都市ホテル設計の解説」(Description on City Hotel Design, 1914)である。自分がもし新帝国ホテルを設計するならどのようなホテルにするかを懸命に考えた成果であると思う。当時の欧米の最新ホテルの情報は、新ホテル建設を任されていた林から得たと考えられる。このことは、林の遠藤への影響を示唆すると思う。

当時林は帝国ホテルの経営を立て直した辣腕支配人として注目されていたが、それ以前は、ニューヨークの山中商会で美術骨董商としての経験を積んでいた。遠藤と林には、日本の伝統文化を新ホテルに活かしたいという情熱があった。廃仏毀釈以前の日本の美術工芸品は、先に見た神仏一体の仏教を基底とする。また二人には、キリスト教徒という共通点があった。そんな林の影響は大きなものだったと思われた。

埼玉大学名誉教授の山口静一先生は、アーネスト・フェノロサのご研究で名高い。「フェノロサをめぐる－林愛作と柳田暹暎」(2018.10.13)と題してご講演頂いた。山口先生は、林愛作によるフェノロサの講演会カタログの日本語訳(1907)、フェノロサのロンドンでの客死(1908)の際の林の行動、フェノロサの『東洋美術史綱』の和訳出版(1921)、「フェノロサ顕彰会」(1947)の創設などをめぐる林と三井寺との関係について資料を基にお話しくくださった。この歳月は、林の帝国ホテル・甲子園ホテル時代を含んでいる。アメリカでもニューヨークでも、林はフェノロサを通じ、天台宗あるいは三井寺との関係を保っていたのである。

もともとはキリスト教徒であったフェノロサはアメリカでは哲学を専攻していた。来日後の活動は「日本美術の恩人」として知られる。山口先生のご研究を繙くと、1885（明治17）年、三井寺法明院律師の櫻井敬徳から戒を受けた。三井寺も天台宗であるから、この時フェノロサは、密教の教義に接する資格を得たことになる。また、林愛作がニューヨークに勤務していた1900年から1908年までは、フェノロサがアメリカに帰国し、東洋美術研究の第一線・第一人者として活動

した最晩年と重なっている。林は、フェノロサとの交流を通じて、日本の伝統美術と仏教との関係について、密教教義に迫るものを時として感得することがあったかもしれない。(1853-1908)

さらに、現・山中商会社長山中譲先生には、「林愛作がいた山中商会—世界を舞台にしたロマン在る挑戦の歴史」(2020.1.15)と題してご講演頂いた。帝国ホテルで辣腕支配人として知られた林は、ライト館の建設という偉業を成し遂げた。しかしその実像はあまり知られていない。林の手腕を山中商会時代の経験に求め、特徴的な経営方針についてお話しいただいた。それは、日本美術への欧米社会の高い関心を前提とする。林は、その社会に美術骨董商として身を置いて、富裕な階層の生活や考え方に接した。その社会にライトもまた関与していたのである。

そんな林愛作について、ご令孫である林裕美子先生にご講演頂いた。単身渡米し学んだ名門マウント・ハーモン時代、フェノロサと交流したニューヨーク山中商会時代、帰国して勤務した帝国ホテル時代、甲子園ホテル時代、香港ホテル時代とあまり知られていない林の人生を貴重な写真・資料と共にご紹介いただいた。帝国ホテル・ライト館も、甲子園ホテルも、林愛作がいなかったら実現していなかった。その実像の一端をご紹介いただいたのである。経営者であり第一級のホテル・ユーザーである林と二つのホテルとの関係は、「利他」という観点からいえば、来訪者への惜しみないサービスであろう。その根底には、キリスト教徒としての母国日本への献身、日米の文化交流、世界平和への願い、欧米の紳士たちと対等に渡り合う矜持と振舞などが見いだせる。

甲子プロジェクトを切掛けに、林愛作研究を始められた建築家の杉本雅子先生には、「林愛作の言葉「家は人格の表現」をめぐる考察—赤坂新坂町に住所をおいた時代」(2017)をご寄稿いただいた。共同研究者として、ご一緒に大阪の山中商会にたびたび運ばせていただいた。

現在、あらためて「家は人格の表現」という林の言葉に注目する。そこで林は以下のように述べている。その本意として、杉本先生の引用を一部紹介する。

「住宅の改良の方針は物質的に便利経済なることのもちろん必要であるが、より以上に必要なことは、その家の生む雰囲気すべてのが主人の趣味嗜好の表現であり、人格の表現であることである。」(茶人になれ、住宅、1917)

この言葉は、一見すると、住宅改良に求めた林の精神論と受け止められる。

一方、心身と衣服というアナロジーで文化・文明のすべての事物・事象を観察し批評したトマス・カーライルの『衣裳哲学』が想起される。カーライルは、特に、心身のうちの心に重点を置き、それが衣服に目に見える形で現れることに着目したのである。それは、林による「趣味嗜好」、「人格」と住宅の関係に相当すると思う。また、カーライルは、時代に即して心身に適した衣服をつくることのできる裁縫師は、各分野における英雄であるとも述べている。林にとっては、それは、生活者が自ら「茶人」たることかもしれない。3-5で再考する。

3-4 建築設計とコンセプト

建築家の酒井利行先生には、「教会建築の設計から学ぶ環境人間学的建築」と題してご講演頂いた。長年、教会建築を手掛けられた先生が、ご自身で磨いてこられた五感に訴える設計方法による実作品の解説をお話しいただいた。五感に訴える総合芸術としては日本の伝統文化・茶室に通じ、建築に携わらない聴講者も興味を喚起されたことと思う。酒井先生は、教会を設計されるにあたり、その都度教会の宗派をキリスト教の歴史や教義の中に位置づけられておられる。また、施主でもある教会側に対して、「人間環境学的研究」をいかにして提示するか、その一端をご紹介いただいた。当たり前の事ではあるが、空間の「豊かさ」は、「余剰」と判断されたら到底実現しないであろう。空間をめぐる佇む身体の運動と関係する五感の変化が、心を落ち着かせ、澄ませるのを助

ける。だからこそ「必要」な空間であるという意図が、施主側に伝わるかどうかであるという。

甲子園ホテルは、宗教建築ではなく、民間経営によるホテル建築である。しかしながら、宗教建築が持つような、建築と心の対話を表現に込めていると思う。遠藤は、独立間もないころから、「人の心を導く建築」を目指していた。それは、遠藤と林が共にキリスト教徒として「慈愛」を大切にし、同時に仏教と日本の伝統美術の内側にある「慈悲」や「利他」を大切に共有していたからこそ可能だったのではないかと思う。その根底に、カーライルの『衣裳哲学』の考え方の共有があったのではないかと考えている。それは、資本主義社会において理想論であり抽象論と捉えたら決して実現しないような祈りや願いを、人間の心にとって絶対に「必要」な存在であると、遠藤も林も共に信じることであったと考える。

3-5 カーライルの『衣裳哲学』をめぐる

武庫川女子大学教授の玉井暲先生に、カーライルの『衣裳哲学』について「トマス・カーライルの「衣裳の哲学」—19世紀英国におけるダンディズムの流行」（2020.12.19）と題してご講演頂いた。難解な奇書ともいわれる『衣裳哲学』を構成や時代背景とともに分かりやすく解説頂いた。もちろん、英文学者としての確固たる基盤の上に立たれたもので、カーライルによる建築様式の捉えた方を考察され、遠藤の三男陶氏の言説を取り上げてカーライルが遠藤の建築論に与えた影響を示唆された。また、19世紀のダンディズムの流行からみた現在のファッションのあり方を言及された。今後の研究会の新たな展開を告げるとご講演だったと思っている。

近年、筆者は、カーライルの『衣裳哲学』を遠藤も読み、ライトも読んでそれぞれに影響を受けてから、林を介して出会った事実注目している。遠藤もライトも、建築という分野における英雄としての建築家たらんとしたと考えている。一方、林がいつ『衣裳哲学』を読んだかは分からない。林と遠藤との1913 - 14年の交流、その時点から続くライトとの交流の中ではすでに読んでいたと考えるのが自然だと思う。なぜならば、1908年の「建築について」（Architectural Record, 1908.3）では、ライトが一人それを読んでいたのではなく、彼の賛同者たちが読んでいたことを示唆している。ライトの施主であり、日本美術愛好家もいた富裕層においては、『衣裳哲学』が読まれていたと思われるのである。したがって、林もまた、山中商会時代に読んでいた可能性は高いと思う。さらに、林裕美子先生によれば、林愛作夫妻は「世の中の大勢の人が着ているのではなくステージ衣装のような恰好を好み」身に着けておられたという。林家の家族写真における服装にも、林の「趣味嗜好」、「人格」が表現され、その源流は、『衣裳哲学』にあるのかもしれない。

さらに、『衣裳哲学』は、「有機的繊維 (Organic Filaments)」など、ライトの有機的建築を想起するような概念がある。また、遠藤の卒業研究には、それを意識した敷地条件の分析や複雑なホテルの機能計画まで、その影響が読み取れる。さらに、時空を超えて物事が関係しあうのは、この有機的繊維のはたらきによるとも述べており、甲子園ホテルにおける敷地の読み取りの姿勢は、卒業論文にすでに示されていると考えている。

「象徴」については、日常に使う言葉では言い表せないで沈黙するべきであると述べている。それは、遠藤が、自信作であるはずの甲子園ホテルについて、特に打出の小槌の建築装飾について記述を残さなかったことに合致する。

さらに、帝国ホテルや甲子園ホテルに見られる世界平和への祈りは、それぞれ日米関係の悪化、日中戦争前夜において建築表現として結実している。遠藤の卒業論文は、第一次世界大戦前夜に書かれた。それは、『衣裳哲学』において、戦争の優勢を目の当たりにしても平和の側にあって希

望を持ち続けるカーライルの主張に重なると思う。

4. 結び—今後の展望

『衣裳哲学』は、仏教ときわめて共通点があると感じる。例えば、「組織的繊維」は「縁」に、「象徴」に対する沈黙は、「密教」に共通する。明治期、秘密仏教である密教が、寺院の外にどのくらい流失したかは不明である。しかしながら社会の枠組みが崩壊する戦乱の世には、出家した僧侶でなくても知り得たであろうことは、室町時代に書かれたとされる『太平記』などからも推察される。とはいえ、秘密とされる以上、筆者自身、記述には注意を要したことを記しておきたい。

今後、研究を進めるにあたり、カーライルが活字化された印刷物として『衣裳哲学』に、前述の諸概念を提示していることは、甲子園ホテルの設計意図の解明だけでなく、ライトの建築論の読み解きにも弾みをつけると期待している。

カーライルは、明治期の知識人に読まれ、遠藤を含む旧制高等学校や帝国大学の学生にも読まれた。それは、カーライルに影響を受けたといわれるハーバート・スペンサーの社会進化論が読まれた時代とも重複している。時代をつくる根底にあるものの考え方は、読まれなくなると文脈や前提が見えなくなる。カーライルをめぐって、建築はもちろん、社会の文化や表現について広がりのある研究会を計画したい。

本稿では、ご講演・ご寄稿いただいた方々すべての内容に言及することはできなかった。それぞれに可能性のある素晴らしい着想や優れた客観性がみられ、次世代に繋いでいけたらそれは大きな喜びである。